



埴谷雄高作品集



対談
I

14

河出書房新社

埴谷雄高作品集 14 ©1980

一九八〇年七月二五日印刷 一九八〇年八月五日発行



著者——埴谷雄高

装画——駒井哲郎 装本——杉浦康平

発行者——清水 勝

発行所——株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三三―二 電話 東京四〇四―二二〇一 営業 四〇四―八六一 編集 振替 東京〇―二〇八〇二

印刷者——多田 基 印刷所——多田印刷株式会社

製版印刷——凸版印刷株式会社

製本所——小高製本工業株式会社 価定は函・帯に表示してあります

対談 I



目次

7—9 序詞

11—37 文学創造の秘密——秋山駿＋森川達也＋埴谷雄高

38—53 私の文学を語る——秋山駿＋埴谷雄高

64—86 『闇のなかの黒い馬』を語る——古屋健三＋埴谷雄高

87—127 革命と死と文学——大江健三郎＋埴谷雄高

128—150 夢と想像力——高橋和巳＋埴谷雄高

151—180 私と『罪と罰』——上総英郎＋埴谷雄高

181—206 ドストエフスキイと現代——秋山駿＋埴谷雄高

207—225 文学の論理と政治の論理——真継伸彦＋埴谷雄高

226—242 戦後文学と思想性——白川正芳＋埴谷雄高

243—273 自由と存在——野間宏＋埴谷雄高

275—281 埴谷さんの宇宙圈の中で——辻邦生

283—297 解題——白川正芳

序詞

私とは、何か。

それは、飛躍によつて、或いは、徒歩によつて、

自身以外のものに絶えずなりたいと志向するところの
不思議な精神である。

文学創造の秘密

秋山駿＋森川達也＋埴谷雄高

政治評論から文学創造へ

森川——以前、読書新聞でしたかで、今後は『死霊』の続篇をずっと書いて行くという事が出ておりましたが……。最近の状況はどういうことでしょうか。もし、見通しでもありましたら……。

埴谷——あれは読書新聞の栗原幸夫君に喋ったのですが、ぼくの真意は、政治論文をやめ、これからは文学的な方向へ戻って行く、その例として『死霊』を続けるという意味だった。しかし、ぼくの文学の仕事の中心は、やはり『死霊』ですから、それを始めているわけですが、どうも進行がのろくてね。現在のところ、「群像」にやつと四十枚くらい渡したばかりなんです。若い編集者で、大変熱心な人が係でね。月二回、できててもきなくてもとにかく来ますというわけです。一番多く渡したのは十枚くらいで、あとは三枚づつ、渡したりして。(笑) せめて十枚ぐらいいは下さいよと言われる。今やつているところは、二百四十枚ぐらいの予定で五章という章ですが、しかし、かなり書き進んでくれば三十枚ぐらい一度に渡せることもあるだろうと思っています。

森川——その二百四十枚というのは、だいたい今の予想で……。

埴谷——だいたい『死霊』という作品は、大きな章に分かれていて、一章は二百枚から三百枚ぐらいですが、頭

の中の概算だと、五章は二百枚をこえて、二百二、三十枚ぐらいになる。

森川——それで終るわけ……。

埴谷——いや終らない。五章がそれで終るわけです。

森川——そうすると、これからずつと……。

埴谷——ええ。六章、七章と行くわけです。しかしさきの方はいわない方がよい。(笑)

森川——ぼくは先年の秋の同志社大学での「埴谷さんを囲む会」のとき、恐らく『死霊』は完成しないのではないかという暴言を吐いたわけですが……。

埴谷——いや、暴言でなくてその通りです。完成しないだろうとぼくも思う。(笑)

森川——その外に、埴谷さんの最近のお仕事としてはドストエフスキイに関する評論、これはNHKからお出しになったB6判のものです。そのあとがきを見ますと、これとは別に、それより少し難解な、と言つては行ですが、そういう書物と取り組んでおられる……。

埴谷——それは、取り組んでいたんですよ。「文学」に数年前四回か五回、書いたんですよ。というのも、これもぼくがいかにか怠け者かという証明みたいなものですが、実は岩波新書で頼まれたのは、ずっと以前のことなのです。それがちつとも進まないものだから、新書の方の係の人が「文学」の係へ行つて、埴谷のところへ行つて、まず「文学」に書かせろと言つた。しかし、新書はいちおう書き下ろしですからね。あとは書き下ろしてくれ、というわけで向うは待つていたのですが、書いてみると、難しくて分からないことがいろいろでてくる。そこで、例によつてぼんやり考えている裡に、NHKのFM放送で話すことになった。それが本になつて先にでてしまつたのです。この喋つたものを文章にするとやさしいけれど、書くとなると、どうしても難しくなりますね。(笑)喋るほうはどうも本質的問題に深く入つて行けない。この本質的に突つ込めなかつたことを、岩波新書の方でやろうとしているのです。ところが、ぼくの気持としては、同じドストエフスキイという題をもつた書物を二冊も同じ年に出す気にならない。岩波としては、ほかの出版社でドストエ

フスキイを先に出すのはケシカランと思つてゐるのですが、ぼくとしては、岩波の方が突つ込んだ仕事だと思つてゐる。ところが、その本気のほうがなかなかできない。大体「近代文学」の連中は、どうも岩波に評判が悪い。ぼくより前に平野君がプロレタリア文学史に関する新書を頼まれていて、ついに書かないんですよ。ぼくの新書の係は田村義也君で、その田村君が、「埴谷さん、新書を出せば、埴谷さんとしては一生に初めてまとまつた金が入りますよ」と親切にセンドウしてくれるんだが、どうも本気になるとなかなかできない。田村君はほんとに困つて、ぼくも悪い気は重々してゐて、何とか早く出したいと思つてゐるんですけど、今年中はどうも難しい。とにかく時間をおいて出します。

森川——来年にでも……。

埴谷——ええ、来年でしようね。しかし、ぼくの来年というのはどうも信用されなくてね。というのは『死霊』のことがあるのです。『死霊』の第一巻は、一、二、三章が入つてゐるのですが、第二巻は四、五、六章と入り、今書いてゐるのはその中の第五章なんです。つまり、その六章まで書いて、第二巻が出てから、ドストエフスキイと思つてゐるわけなんです。

森川——すると『死霊』第二巻の方が先に出るという……。

埴谷——ええ、頭の中の予定では、そういうことになつてます。

死霊のモチーフ——自同律への不快

森川——としますと、当面、読者が手にすることのできる埴谷さんの創作は、『死霊』第一巻と、吉本隆明さんが編集された『虚空』という短篇集の二つがあるわけですね。

埴谷——いや、『虚空』では、吉本君は編集でなく解説を書いてくれたんです。

森川——ああ、そうでしたね。その二つがあるだけですね。そうしますと、まあ、どちらもそれぞれ問題がある

わけですが、差し当たって一番重要な意味を持つてくるのは『死霊』という未完の長篇になると思うんですが……。

壇谷——そうなるでしょうね。

森川——あれは、戦後に書き始められたわけですね。

壇谷——ええ、そうです。

森川——しかしあの作品のモチーフは、ずっと以前からお持ちになっていた……。

壇谷——そうです。古いことをいえば、ぼくに『不合理ゆえに吾信ず』というアフオリズム集があるのですが、そこに『死霊』のモチーフが既に全部出ているんです。ぼくは昭和七年に豊多摩刑務所に居りましたが、刑務所生活では、すべてが早く、七時に寝なければならぬ。ところが、ぼくは若い頃から不眠症で、七時という時間にはとうてい眠れない。殊に夏などは、七時というと、まだ空が明るい。寝ていると、ちょうど正面の部屋の高窓から明るい空が見えるんですね。そこで、どうしてもいろんなことを考えざるを得ない。実にいろんなことを考えました。この時代は、ぼくの転向時代で、考えは、政治的なものから、文学的なもの、哲学的なもの、存在論的なもの、へと互いにいり交りながら段々と拡がっていった時代で、こういう考えを毎夜つづけていると、つぎの夜考えつづけるためには、その考えを或るかたちとして前の夜とめておくのが便利なんですね。しかも、その考えは安定していかないで、いわば反対の考え方も同じ力で出てくるので、アフオリズムとしてもとらえられるそれぞれの考えを小説のなかの諸人物に当てはめておくと、考えをつづけ易い。そして、そうした拮抗したいろいろな考えを積みあげたのが、『死霊』の原型です。今から考えますと、確かにそれは原型で戦後のかたちはだいぶ変つてきていますけど、その骨格は違っていない。何故変らないかと言うと、『死霊』にも『不合理ゆえに吾信ず』にも出てきますが、自同律の不快ということがぼくの考えの底から離れないからです。これが、ぼくの根本問題ですね。思惟の前提がぼくにとつて疑わしく、不快なので、どうしてもぼくの考え方は一種存在論的にならざるを得ない。ぼくは、『死霊』の解説みたい